

入選

親切の輪

学習院女子中等科
一年 下野 理央

「あなたもこれ食べる？」

母が用事で学校に行ったときに、突然シンガポール人の女性から、英語でそう声をかけられた。母に声をかけたのは、私が通学するときに乗っている学校バスの「アンティー」だった。

私が通っていたシンガポール日本人小学校には、児童専用の学校バスがあり、毎日学校から家の近くまでそのバスで通学していた。そして、そのバスには、シンガポール人の運転手のほかに、生徒たちの面倒を見てくれるアンティーがいっしょに乗っていた。

そのアンティーが、学校で母を見かけると、母のところへかけ寄ってきて、自分の昼ご飯である「ちまき」を分けてくれたのだった。

母は、ほとんど話したこともない、シンガポール人のアンティーに親切にされて嬉しかった反面、なぜ自分がそのように親切にされるのか、不思議だったようだ。

でも、私にはその理由がわかる気がした。

母は、毎日家の近くのバスから乗り降りするところまで、送り迎えをしてくれていた。ほかの保護者の人たちは、バスから少し離れたところで、子どもたちを見送ったり出迎えたりするのだが、母は必ずバスのドアのところまでやってきて、運転手とアンティーに、笑顔で「Good morning!」や「Thank you!」と元気にあいさつをしていた。

だから、アンティーは母のことを覚えていて、いつも親切に接してくれたのではないか。

私自身にも、アンティーとの思い出がある。私が何日か学校を休んでいて、久しぶりに学校に登校してバスに乗ったときのことだった。アンティーが突然、私の座席のところに来て、私に英語でこう話しかけてきた。

「しばらく学校休んでいたけれど、どうしたの？ 心配していたわよ。」

最初はとても驚いた。同じバスの中には、ほかにもたくさんの子が乗っているのに、わざわざ自分のことを気にかけてくれていたんだ、と。

でもそのとき、ピンとくるものがあった。アンティーが私に親切にしてくれたのは、きっと母と同じように、私もバスから降りるたびに、アンティーや運転手に目を合わせて、「Thank you!」と積極的にあいさつをしていたからだ。

人に親切にされると、こちらも親切を返したい気持ちになり、親切の輪が広がっていく。私たちは、そのアンティーのことを好きになり、日本語を教えてあげたり、日本に帰国するときには、いっしょに写真を撮ったりした。

考えてみれば、このような親切の輪は、毎日目を合わせて、笑顔であいさつし続けたことから生まれた。ささやかなことではあるけれど、元気にあいさつをするなど、小さな心のふれ合いをふだんから大切にしようと改めて思った。